

(2) 日吉神社大神楽

南町に位置する日吉神社の創建は、遠藤慶隆が元龜2年（1571）にこの地方にあった、原野の中央の小さな社に武運の隆盛を祈り、天正年間（1573～1591）に安久田村から山王を合祀し、八幡城下の吉田川以南の守護神として境内を定め、大宮山王と名付けられた。当社は日枝社と呼ばれていたが、日吉社とよばれるようになる。文化8年の記録によると、寛保年間には神楽は行われていたとある。

明治5年までは旧暦3月14日が衣装付、15日と16日が祭礼で、同25年までは祭礼は9月20～21日であった。明治26年からは4月20～21日となり、昭和51年まで行われていた。昭和52年から4月第3土日に行われている。

南町の城下を東西に通る立町と、その南に位置する日吉神社をつなぐ通りは「大門（だいもん）」と呼ばれ、町家や共同井戸なども残っている。寛文年間絵図【1-4-24】では、吉田川の南側に「立丁」とあり、通りの北側に「御足軽仲間」、南側にも「御仲間」とあり、通りから南に折れると「若宮」とある。大門の入り口には大正12年に建てられた石柱が建つ【2-3-19、20】。御渡曲の「こすずめ」は、この大門でのみ演奏される。

境内に入ると、鳥居、宮ヶ瀬橋にかつてあった大灯籠（文政4年）があり、門は西側の山本町側に設けている。門の正面に拝殿と幣殿、左手に参集殿、拝殿の奥に覆屋を設けて本殿があり、本殿の両脇に秋葉と稲荷の小社が配置されている【2-3-21】。

本殿は、3間社流造で、『郡上八幡町史』によると、天保年間（1830～1843）に改築されている【2-3-22】。拝殿と幣殿は昭和42年に焼失したため、同44年再建された。



2-3-19 日吉神社 大門 大正12年



2-3-20 日吉神社 大門の設え



2-3-21 日吉神社 境内（拝殿）



2-3-22 日吉神社境内 本殿

日吉神社大神楽の神楽舞は、上獅子、牡獅子、牝獅子で、渡御曲は、十二神楽、岡崎（帰りの曲）、岡崎くずし、ちやぶろい、こすずめである。役と行列の順は【2-3-24】に示す。

この大神楽の特徴は、獅子が高く舞うところにある。また、こすずめは大門での宮入りのみで演奏する曲である。渡御曲は、曲がり角で曲を変えており、ところどころで芝居を打つと、歓声が上がる。

近世の記録から、大神楽の順路は、文化8年(1811)「神楽順路留」にみることができる。文政8年(1825)「殿様御在所ニ付神楽献上役割」では、藩主が在城の際、神楽を奉納したことが記されており、北町で家老や郡代の前、惣門橋、大乘寺入口などで打たれた様子がわかる。文久2年(1862)「永代用神楽打上帳」では、3月14日が衣装付、3月15日に久五郎宅前にて神楽を打始め、宮迄打ち、拝殿前で神楽をあげ直し、当時の嶋方の左京、堅町、川原町、名廣（乙姫町、山本町）、中藪（北朝日町、常盤町）など東部を廻り、宮ヶ瀬橋を渡り、岸劔神社に向かう。また南町へ戻り、新町、稲荷町井山、大坂町などを回りながら宮へ戻る。16日には本楽を打始め、堅町、左京、橋本町、今町、榊形、新町、大坂町など西部を廻り、宮にて打つ様子が記されている。

昭和34年「日吉神社例祭大神楽奏楽道順」【2-3-25】では、衣装付が上日出町で、試楽は日出町から始まり、南町の西部を廻り、新橋を渡り北町へ、本楽では、日吉神社から始まり、南町の東部から中央部を廻る順路となっていた。

平成22年度の順路【2-3-28、29】をみると、午前7時から年行事打出し宿（中央コミュニティーセンター）から、笛の音とともに始まり、日吉神社へ向かう。日吉神社で試楽を打ち始め大神楽を奉納する。日吉神社を出て、東の愛宕神社へ向かい、大神楽を奉納する。八幡大橋を渡り、吉田川の河畔を通り、北町にある八幡神社で大神楽を奉納すると、南町を練り歩きながら日吉神社へ戻る。また、日吉神社を出て、大坂町【2-3-26】、今町、新町を通り、宮ヶ瀬橋を渡り、北町に入ると、岸劔神社で大神楽を奉納する。宮ヶ瀬橋を渡り、橋本町から願連寺前までくると、宮大門までは時間をかけて進む。大門から宮入りとなり、日吉神社で私学の大神楽を打納め、午後9時30分に年行事（中央コミュニティーセンター）へ戻る。

本楽では、午前7時に年行事（中央コミュニティーセンター）から打出し、日吉神社で二芝居打つ。それから、榊形町、住吉町など南町の西側を成り歩き、条南町、大正町、栄町などを

2-3-24 日吉神社大神楽 役内訳

露払い 1	笛吹き 10	神楽堂荷役 4
幟り 4	鼓打ち 10	市兵衛 1
警護 2	舞子 3	おかめ 1
天狗 1	獅子廻し 6	鳥天狗 1
出花 1	大幣振り 1	床几持ち 4
神持ち 1	付太鼓 1	

2-3-25 「日吉神社例祭大神楽奏楽道順」 (昭和34年)

衣装付	上日出
試 楽	日出早、下日出早、下日吉早、 $\square$ 形早、八軒早、新道、新開地、大正早、今小早、中横樹形早、下中日吉早、大阪早、上日吉早、稲荷早、中央通 δ 櫻早へ、櫻早、神農薬師、柳早、中柳早、上柳早、洞（八坂神社、中坪中）、上殿早、職人早、鍛冶屋早、本早、肴早、殿早、正木早、中殿早
本 楽	日吉神社、山本早、乙姫早、川原早、愛宕早、若宮早、北朝日早、南朝日早、常盤町、左京早、立早、橋本早、新早、今早、栄早、新栄早



2-3-26 日吉神社大神楽

廻り、中央コミュニティーセンターへ戻る。午後になると、出立し、日吉神社で大神楽を奉納し、旧八幡町役場前で大神楽を奉納し、稲荷町、日吉町、大坂町、さらには城南町まで廻り、火入宿（南部コミュニティーセンター）に向かう。午後7時30分に出立し、宮大門ではこすずめを演奏し、日吉神社に向かう。境内で本楽の大神楽を打納め【2-3-27、28】、午後9時30分に年行事（中央コミュニティーセンター）に戻る。

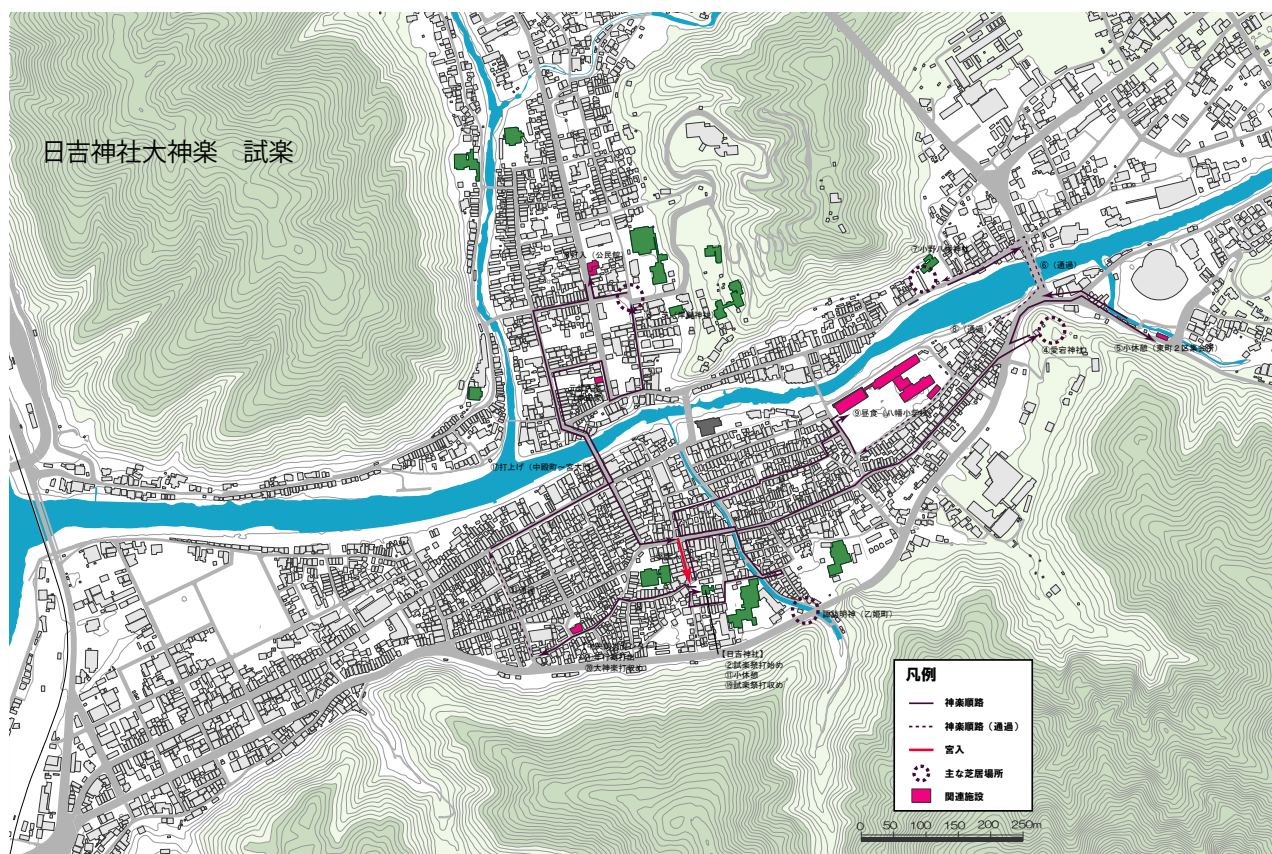
日吉神社大神楽は、南町の日吉神社と、愛宕神社、北町の八幡神社や岸劔神社、また合同奉納のため、旧八幡町役場庁舎前などの要所を廻りながら、南町の西は駅付近の城南町、東は東町までと、すみずみまで練り歩いている。この日吉神社大神楽が練り歩く北町も南町も近世城下町を起源としており、町家群が建ち並ぶ町並みを形成している。



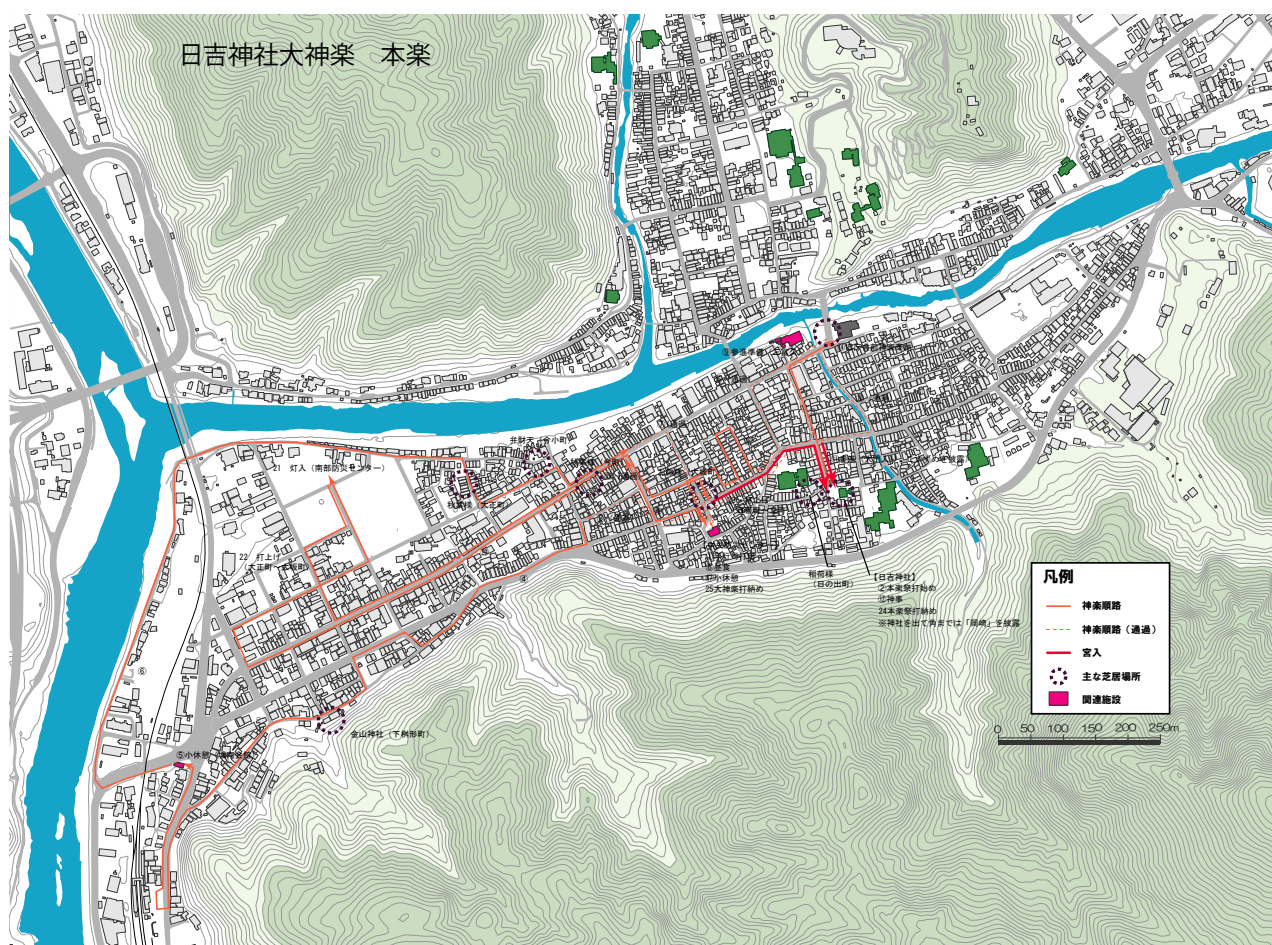
2-3-27 日吉神社大神楽 境内



2-3-28 日吉神社大神楽 拝殿前



2-3-28 日吉神社大神楽 試案順路



2-3-29 日吉神社大神楽 本案順路

(3) 小野八幡神社祭礼

八幡神社は、承久2年（1220）、藤原頼保が勅命で郡上に驚退治に行き、途中で拾った鷲の羽根を岩間に差しておいたところ、村人が御神体として山頂に社をたて、羽根に「八幡」の字があったことから八幡宮と呼ぶようになったとされる。八幡神社は、永禄2年（1559）遠藤盛数が砦を築いた際、社殿を山上から桜町の東側にある現在の位置（小野字ヒツツリ）に移した。その後歴代城主の祈願所であった。明治6年郷社に指定され、同40年に同地の無格社天満神社と宇西山の無格社神明神社を合祀し、同45年無格社若宮神社と宇堂前水神社と合併した。

八幡神社で行われる例祭の試楽、本楽の日程は、「年代記録 抄」（長滝寺文書）によると9月24日に試楽、25日に本楽であったが、昭和30年に小野村が八幡町へ合併する際、春祭りに合わせて4月20～21日、現在は4月第3土日となっている。

境内には、鳥居の奥に文化3年（1806）の常夜灯が2基、八幡神社と天満神社の拝殿と、その奥に八幡神社本殿、天満神社の本殿、幣殿、神明系の鳥居などがある【2-3-26】。八幡神社本殿は拝殿奥の石積みの上部に位置し、覆屋で覆われている【2-3-27】。間口3間3寸、奥行2間3尺、流造で、本殿内にある棟札から、慶応2年（1866）の建築である。

小野八幡神社祭礼は、寛文7年（1667）8月、遠藤常友が長滝の禰宜神子を招いて奉納したのが始まりといわれている。嘉永元年（1848）8月の祭礼記録によると、「領主への上覧の節は正式行列を以て鞆御殿のある殿町を練歩し領主の御殿前にて神楽及奴踊を上覧に供する事」と領主は江戸在住期間が長くなり、在城期間が少ないので、「領主への上覧は五年あるいは七年に一度位」とある。

祭礼は、輪番制の打ち出し宿で大神楽と奴踊を打ち上げ、神社に向かう。神事が始まり、お祓い終了後、大神楽舞、奴踊が奉納される。道中の囃子の変化や宮入りの大神楽等は、伊勢神宮系の特徴を忠実に伝えている。奴踊は曲目も多種であり、他所ではみられない貴重な民俗芸能である。曲目は、道行、岡崎、宮入、縁上げ、本神楽、変わりで、同中の囃子の変化や宮入の大神楽は、伊勢神宮系の特徴を伝えている。



2-3-30 八幡神社 境内



2-3-31 八幡神社 本殿



2-3-32 八幡神社 境内

る【2-3-32、33】。

小野八幡神社祭礼の役の内訳【2-3-34】にあるように合計は45名程度である。岸剣神社の大神楽と日吉神社大神楽と異なる点として、奴がみられるのが特徴である。

試楽の順路【2-3-35】を見ると、小野の打出し宿で奴踊りと大神楽を打出し、山側の順路を進み、神明神社跡の麓で岡崎を披露し、八幡神社へ向かう。八幡神社からは川側の順路をとりながら小野の端まで廻る。

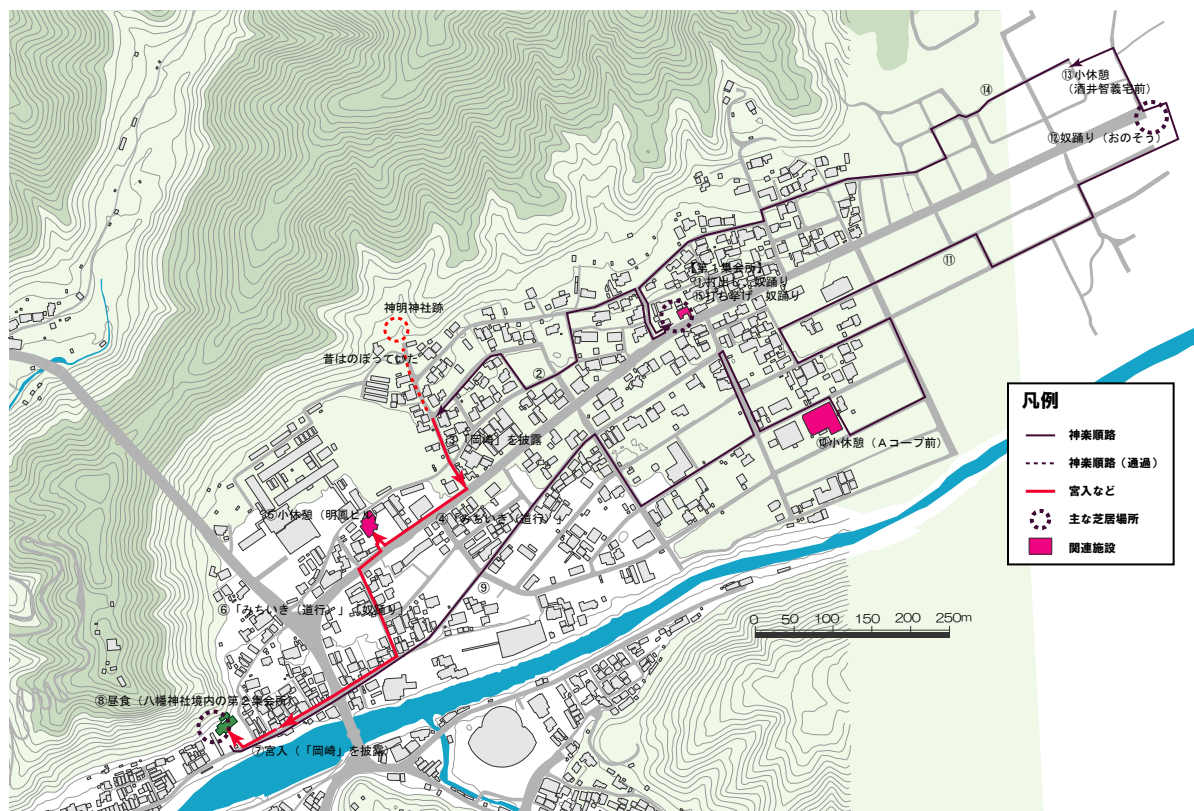
本楽では、小野の打出し宿を出立すると、まず八幡神社へ向かう【2-3-36】。八幡神社へ宮入りする際は、曲がかわり、奴は一列になって練る。八幡神社の正面で2列になり、奴は練りながらゆっくりと宮に入る。神事が行われ、大神楽を奉納し、奴踊が始まる。八幡神社を出ると、桜町を通り、城下町プラザで大神楽と奴踊を披露し、新橋を渡り、合同奉納の旧八幡町役場庁舎前に向かう。奴踊を披露すると、新町、大坂町を通り、日吉神社へ向かい、日吉神社でも奴踊を奉納する。立町、川原町、愛宕町を通り、愛宕神社でまた奴踊を奉納すると、宿へ戻り打ち上げとなる。小野八幡神社祭礼は、北町は城下町プラザ、南町は大坂町以東、そして小野全体を廻り、大神楽と奴踊が奉納されている。



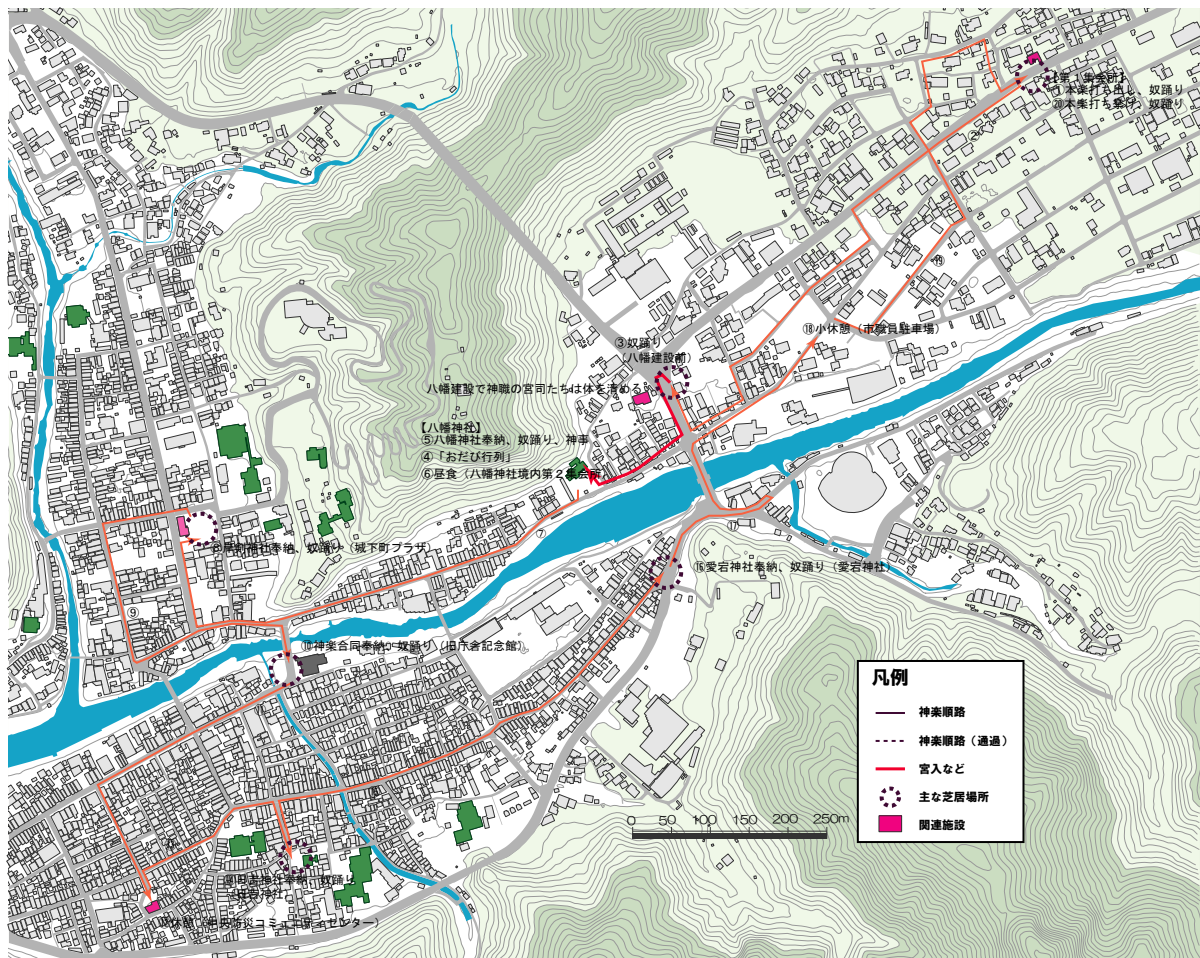
2-3-33 八幡神社 境内

2-3-34 小野八幡神社祭礼 役内訳

警護 4	音頭 3	おかめ 1
東西呼び 1	地唄 4	天狗 1
神楽舞 3	鼓打 6	奴 9
小太鼓 1	獅子舞 3～5	
笛吹 6	ひょっとこ 1	



2-3-35 小野八幡神社祭礼 試楽順路（平成22年）



2-3-36 小野八幡神社祭礼 本楽順路（平成 22 年）

近世城下町の形成とともに配置された神社で行われている祭礼は、城下町の歴史とともに人々により継承されてきた。神社の祭礼は神事や大神楽の奉納が行われる境内だけでなく、岸剣神社大神楽の宮ヶ瀬橋、日吉神社大神楽の宮大門、八幡神社鳥居手前の通りなど、合同奉納が行われる旧八幡町役場庁舎前など、大神楽等にとって特別な曲目を演奏する重要な場所がある。また、3つの神社は、吉田川を挟んで北町と南町に配置されているが、吉田川を渡り、お互いの神社で大神楽を奉納する。さらに、ゆかりのある神社や町中でも芝居を打つ家があり、市街地の北は中坪、東は小野、西南は駅付近の城南町と、旧城下町の範囲を超えて、山に囲まれた市街地を2日間で廻っていく。そして城下町の町割を伝える通りで大神楽は丁寧に廻わり、伝統的な町家による町並みを背景に、獅子が舞い、観衆が湧く。

この2日間に及ぶ祭礼は、氏子、住民の多くが自ら演じ、祭礼に参加する春祭りであり、城下町の歴史を感じながら、山で囲われた市街地の広範囲で、町と住民の一体感をもっとも感じることができる、人々の営みである。

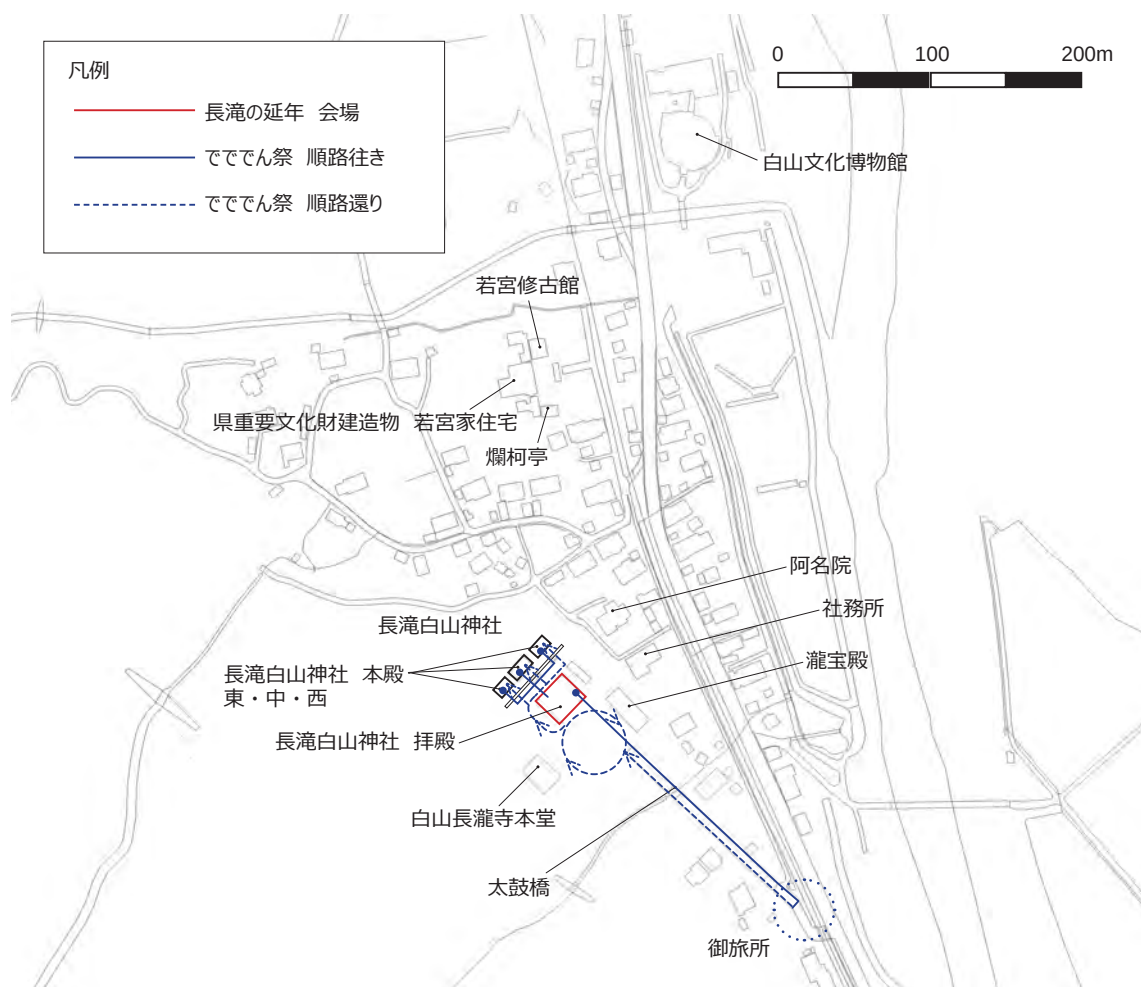
城下町の歴史を伝える神社や通り、山で囲われた町並みを背景に行われる3つの大神楽は、大神楽の笛の音と、大神楽を演じる人々、それを見守る人々により、春の到来を伝え、吉田川を渡り行き来する大神楽により、城下町に息づく人々のつながりと町の一体感とともに、歴史的風致を醸し出している。

4. 長滝白山神社と長滝の延年にみる歴史的風致

長滝白山神社は、郡上市の北部、白鳥町長滝に位置する。長良川鉄道白山長滝駅の西側から西北方向に参道が伸び、参道沿いには、^{きょうまんぼう}経間坊、^{ほうどうぼう}宝幢坊、^{あみょういん}阿名院などの塔頭が建つ。太鼓橋を渡り、参道を進むと長滝白山神社と白山長瀧寺の境内に入る【2-4-1】。

境内の中央には、「正安四年〈壬寅〉那月日願主伝燈大法師覚海」の刻銘がある「石燈籠」（重要文化財（美術工芸品））1基が据え置かれている。参道に正面を向けて、長滝白山神社拝殿、その奥には、中央に本殿とその左右に両脇社が建つ。拝殿東側には社務所と「白山長滝神社の大スギ」（県天然記念物）が位置する。「石燈籠」の西側には蓮池と白山長瀧寺本堂、東側には仏像を安置している白山瀧宝殿が建っており、神社と寺院が同じ境内地に配置された、白山信仰の神仏習合を今に伝えている。

長滝白山神社の本殿は大正8年【2-4-2】、拝殿は明治末期～大正期【2-4-3】、白山長瀧寺本堂は昭和11年の建築である【2-5-4】。石積み上部の板塀の瑞垣に門を3箇所設け、本殿と東西の3棟が南面して建つ。本殿は桁行6間梁間3間、木造切妻造平入りの神明造で屋根は中央部が一段高くなっていて、金属板で覆っている。東西社も木造切妻造平入りの神明造である。拝殿は、桁行10間梁間8間、入母屋造金属板葺で南東に面して建つ。平側を正面とし、正面



2-4-1 周辺位置図

中央と両脇に出入り口を設けている。正面側4間ほどは土間敷きで、土間より113cmの高さに奥行2間ほどの板敷きとなっている。その奥にはさらに21cm上段に板敷となっており、中央4間は舞台で左右は楽屋となっている。天井は格天井で、土間敷きの天井部分に花笠がつるされる。

境内周辺には、長良川鉄道沿いを北上すると西側に若宮家住宅（県重要文化財建造物）、長良川鉄道を挟んで東側には、長滝白山神社や白山長瀧寺に伝わる宝物を収蔵している白山文化博物館がある。若宮家住宅は長滝白山神社宮司の住宅で、桁行9間半、梁間5間、木造平屋建、切妻造平入り、トタン葺である【2-4-7】。建築年代は、一部が天明5年（1785）、ほかは文化8年（1812）である。敷地内には、天保4年（1833）建築の若宮修古館と近代和風の建物で谷崎潤一郎の『細雪』の舞台になった爛柯亭が、昭和41年に移築されている。

白山は、富士山、立山とともに山岳信仰の霊山の一つに数えられ、白山神社は全国で2700社を超えるという。白山信仰は、伝承によると養老元年（717）泰澄が白山の山上に三所権現を祀り、麓に4社の神殿を建立したことが起源とされている。美濃・越前・加賀の三方から白山に参詣する道が開かれたとされており、美濃側に社として長滝白山中宮ながたきはくさんちゅうぐうが建てられた。そして養老7年（723）から神仏習合の白山本地中宮長瀧寺と号するようになった。また、『白山記』（白山比咩神社所蔵）によると天長九年（832）に白山信仰の三方向の馬場を開いたとある。美濃から向かう美濃禅定道は、洲原神社（美濃市）から長良川を北上し、白山中宮長瀧寺、石徹白の白山中居神社を経て、白山の山頂を目指した。

長滝白山神社周辺は、美濃禅定道の拠点「美濃馬場」として、平安・鎌倉時代には、「上り千人下り千人」といわれるほど栄えたという。治安元年（1021）天



2-4-4 長滝白山神社 本殿



2-4-5 長滝白山神社 拝殿



2-4-6 白山長瀧寺 本堂



2-4-7 若宮家住宅

台宗延暦寺の別院となり、さらに勢力を増していくが、文永8年（1271）白山中宮長滝寺は火災にあい、14宇の堂塔が全焼した。その後応長元年（1311）に間口18間、奥行14間の大講堂が再建されるなど、数十年をかけて30余宇の堂塔を再建した。その過程では、仏像をはじめ多くの宝物が寄進され、この頃、全盛期を迎えた。

中世から近世にかけて郡上一円を治めていた東氏や遠藤氏からは庇護を受けていたが、郡上藩となって、城主が遠藤氏から井上氏と変わると、長滝寺領に課せられるようになる。また、寛保3年（1743）には白山別当職を越前平泉寺と争い、敗訴して白山における権威を失った。

明治になり、神仏分離令により白山中宮長滝寺は、解体され、長滝白山神社と白山長瀧寺となった。明治32年（1899）近隣の民家より出火した火災により、長滝白山神社本殿、拝殿、14世紀初頭の再建から500年後の文政8年（1825）再建した大講堂をはじめとする堂塔伽藍のほとんどを焼失した。長滝白山神社は明治34年に再建に着手し、東西両社、拝殿、次いで大正8年に本殿を再建し、昭和11年には白山長滝寺は本堂を建設した。

白山信仰の重要な場所であった長滝白山神社では、毎年1月6日に「六日祭」が催され、拝殿において「長滝の延年」が奉納される。「延年」は平安時代には歌舞管弦の催しを意味し、鎌倉時代以降寺院の遊宴芸能となり、恒例化し年中行事になったものと考えられている。

長滝の延年の記録として、文禄四年（1595）経聞坊慶倫『白山長滝寺修正延年之次第』や慶安元年（1648）経聞坊慶祐『修正延年並祭礼次第』があり、演目が記されている。長滝の延年は、これら記録にあるようにかつては修正延年しゅしやうえんねんといい、白山長滝寺の修正会しゅしやうえの中で行われた延年であった。修正会は毎年正月初めに旧年の悪を正し、新年の天下泰平などを祈る法会で、期間は通例大晦日から正月6日までの7日間である。本来の修正会という法会の余興から延年そのものを主体とした行事になり、「六日祭」という例祭の形で継続・伝承されている。

近世の六日祭については元禄三年（1692）長滝寺文書『莊嚴講執事帳』などに見ることができる。長滝の延年は、大晦日から7日間、新年の安泰と豊作を祈る修正会で、最終日の1月6日に、若い僧たちが芸能で神主や僧侶をねぎらったものものであった。江戸時代までは僧侶や神官だけで行われてきたが、明治以降「長滝の延年」は長滝白山神社の氏子である長滝地区で伝承されており、長滝の延年にみられる芸能は、昭和52年、重要無形民俗文化財に指定されている。

六日祭の準備は12月25日に阿名院にて役割分担の相談が行われ、27日はすす掃き、28日は回り総代が阿名院に集まり、神主のお祓いを受けてから餅つきを行う。大晦日は回り総代や大総代が長滝白山神社本殿の儀式に参加する。1月2日から延年の稽古が拝殿で行われ、阿名院では桜、菊、牡丹、椿、芥子の花笠を二日間で作り、当弁竿などの小道具の



2-4-8 阿名院での準備

補修も行われる【2-4-8】。5日は^{しんがく}試楽として6日と同じ進んで総練習が行われ、6日早朝は、拝殿の舞台中央に菓子を盛り、花笠を阿名院から運び、拝殿の天井に吊るす【2-4-9】。

6日の午後1時に社務所の板木が鳴り、神主、県神社庁の献幣使などが社務所を出て拝殿に向かい、拝殿で神事が始まる。一連の神事が終わると、長滝の延年が始まる。

最初の演目「酌取り」は、修正会の宴会の形を伝えるものといわれており、2人ずつの上酌と下酌が演じる。「箒の清め」「膳直し」、酒を注ぐ作法を演じる「見せ酌」、上段の舞台に設置した菓子台で行う「菓子台の盃」、参拝者に菓子をまく「菓子台まくり」を行う。

「当弁（とうべん）」は烏帽子をかぶり、狩衣をまとった梅と竹の二人が、それぞれ当弁竿を持ち、拍子に併せて舞う。この時、太鼓1名、笛4名の演奏がある【2-4-10】。

「露払い」では、陣羽織を着て猩々の面を付け、太刀を差した露払いが、右手に扇を持ち、笛に合わせて踏み足をする。

「乱拍子」では、禁の烏帽子に緑色の狩衣、紫の袴に右手に赤房垂らした扇を持ち、左手には2本の白菊の造花を持った稚児2人が、笛と太鼓の拍子に合わせて足で拍子を踏む【2-4-11】。

「田歌・花笠ねり歌・とうべんねり歌」ではふし役が歌い、梅と竹の当弁が2人が舞う。この時、土間では天井から吊るされた花笠を奪い合う「花奪い」が行われる【2-4-12】。天井に吊るされた花笠は6日早朝に阿名院から拝殿に運ばれ、約10mの竹竿に西側から桜・菊・牡丹・椿・芥子の順に間隔を置いて取り付けられる。若者たちは、人梯子を汲み上げ、花笠を争奪する。奪い取った花笠は、家内安全や豊作を願う縁起物として家に持ち帰る。この様子は「花奪い祭り」とも呼ばれている。



2-4-9 花笠



2-4-10 当弁（とうべん）



2-4-11 乱拍子



2-4-12 花奪い

壇上では「しろすり」という、白鉢巻きに茜染の襦袢を着て、黒地の両たすき掛けをし、作り物の大型の木鍬をかつぎ、木製の鎌を腰に差した者が演じる。田を打つ所作があるため「田打ち」とも呼ばれる。

「大衆舞」では、舞人が足で拍子を踏みながらテンポよく舞い、「長滝の延年」は終了する。

長滝白山神社の例祭は、5月に行われる五月祭がある。慶安元年（1648）修正「延年並祭礼次第」（「若宮家文書」）によると5月5日は正月6日と同じく延年の舞が催され、加えて狩馬・御輿御幸行われていたという。

白山三社のご神体を奉じた三台の神輿を氏子が担いで、太鼓をデデデン・デデデンと打ち鳴らして御幸されるため、通称でででん祭と呼ばれている。

5月4日に三体の御輿を拝殿に奉じられ、総代が太鼓を打ち鳴らし、菖蒲・よもぎ・山吹が御輿前に飾られ、ちまきが供えられる。

5日に神事が始まり、蒲安の舞が舞われる。太鼓が打ち鳴らされると御輿の御幸が始まる。かつては、7、800 m先の二日町駅付近まで行われていたそうであるが、現在は鳥居の外が御旅所となる。

御輿は、東・中・西の順で渡御される。御旅所で祝詞奏上があり、氏子。御輿舁きが御神酒を受ける。御腰は参道を登り、太鼓橋・銀杏坂を経て広庭に登る【2-4-13】。広庭を右回りに3回ほど廻って、拝殿の左側からそれぞれの社殿に還御される。



2-4-13 ででん祭

長滝地区は、白山信仰の拠点であった美濃馬場の中心的存在であり、寄進された仏像など白山信仰に関連する多くの文化財とともに、その歴史を伝えている場所である。白山信仰で隆盛を極めた壮大な伽藍配置や、山岳信仰として多くの参拝登山者を集めた長滝白山神社では、1月6日という極寒の中、中世から伝わる優雅な「長滝の延年」と、若者の熱気を感じる「花奪い」が六日祭として行われている。長滝白山神社で執り行われる長滝の延年にみる歴史的風致は、凜とした寒さの中で、白山信仰と中世の文化を醸し出している。

コラム 拝殿踊りと白鳥踊り

白鳥町では、昭和22年に白鳥踊り保存会を発足し、江戸時代中期から昭和戦前まで、社寺境内や拝殿で踊られていた踊の中から、白鳥踊り保存会が代表的ないくつかの曲目を選んで整備したのが「白鳥踊り」である。発足当初は白鳥神社で踊ら得ており、昭和22年は9月17～19日の3日間、同23年は7月と8月14日、16日、9月17～19日であった。また、変装踊りは昭和26年から白鳥駅前で行われるよ



2-4-15 拝殿踊り

うになる。昭和37年頃から白鳥踊りが観光としても取り上げられるようになり、昭和41年に切子が飾られた商店街でも踊られるようになり、踊日程と会場が増設された。平成7年からは、白鳥踊りの古い形式を伝承するため、白鳥神社拝殿で鳴り物がない拝殿踊りを行っている。「白鳥の拝殿踊り」は平成8年に白鳥町重要無形民俗文化財に指定され、平成13年に「白鳥の拝殿踊り」が県重要無形民俗文化財に指定され、平成15年「白鳥の拝殿踊り」が記録作成等の措置を講ずべき無形の民俗文化財に選択された。

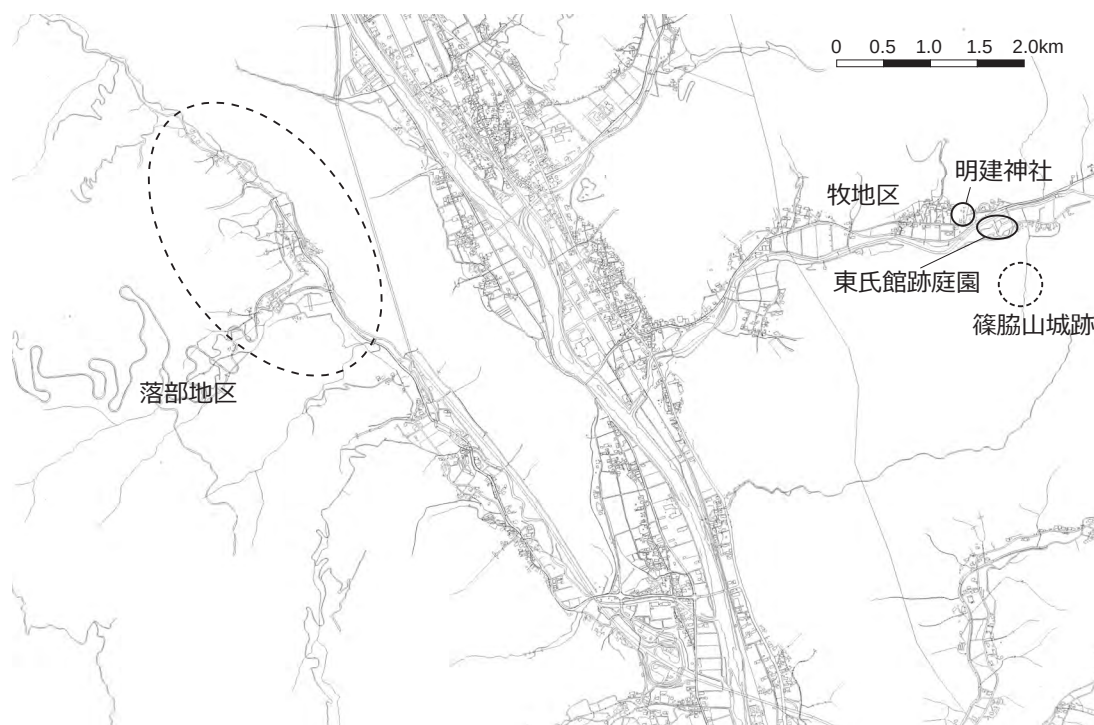
現在では、三味線、太鼓、笛が揃った囃子方が上がった屋形を中心に、商店街などで踊られる白鳥踊りと、拝殿で鳴り物なしで踊られる白鳥の拝殿踊りが踊られている。7月20日前後に行われる発祥祭に始まり、8月下旬のおどり納めまで約20夜にわたり行われている。8月13～15日の3日間は徹夜おどりが行われ、翌朝4時まで踊り明かされる。8月17日の白鳥神社、8月20日の野添貴船神社では、鳴り物なしで唄と下駄で音頭をとる拝殿おどりが行われる。9月下旬には変装踊りが行われているなど、郡上の夏の風物詩の一つとなっている。

5. 明建神社と七日祭にみる歴史的風致

みょうけんじんじゃ なぬかびまつり

明建神社は、郡上市大和町中央よりやや東側に位置する。国道 156 号線徳永地内から東に折れ、2km ほどのところで【2-5-1】、長良川の支流栗巣川の北側にある明建神社の社叢は県指定天然記念物【2-5-2】となっている。栗巣川の南側には、篠脇山城跡（県史跡）【2-5-3】と中島を配した池泉回遊式の東氏館跡庭園（名勝 昭和 62 年指定）【2-5-4】が位置する。

下総国の千葉氏の一族である東胤行が、承久 3 年（1221）の戦功により香取郡東庄（千葉県）に美濃国郡上郡山田庄（郡上市大和町、白鳥町・八幡町の一部）が加領され、東氏が阿千葉山（現在の大和町剣）に阿千葉城を構え、郡上での東氏の時代が始まった。明建神社は、東氏代々の守護神である妙見菩薩を、13 世紀に下総国から勧請し、阿千葉城の南に建てられたと伝えられる神社である。



2-5-1 牧地区と落部地区 位置図



2-5-2 明建神社社叢



2-5-3 篠脇山城跡

鎌倉時代末期、第4代東氏村（正中2（1325）～天授3（1377））が大和町牧にある篠脇山に居城を移した際、明建神社も大和町牧に移転した。その後、天文10年（1541）東氏の居城が八幡赤谷山城へ移っても、明建神社は同地にとどまった。江戸時代までは妙見菩薩を祭神とし、妙見神社と呼んでいた。明治の神仏分離により表向きは祭神を国常立尊とし明建神社と改めたが、現在も妙見菩薩を祭神としている。



2-5-4 名勝 東氏館跡庭園

明建神社の社叢には、横大門といわれる横参道の脇に2本の大杉が立つ。鳥居から本殿へ向かって左側が「神帰り杉」といわれる大杉で【2-5-5】、横大門の両側には、篠脇城付の馬場跡といわれる桜並木が続く【2-5-6】。「神帰り杉」から230 m余り先へ行くと「神迎え杉」がみえる。

「神迎え杉」の手前で左折し、表参道（竪大門）を通り、100 mほど先に拝殿（天保13年（1842）再建棟札）、その奥に本殿（市重要文化財建造物）【2-5-7】が配され、本殿は文政5年（1822）再建である。

明建神社本殿は、石積みの上に構えており、正面に門を設けた瑞垣で周囲を囲われている。桁行3間、梁間2間、1間向拝を設け、切妻造平入銅板葺の屋根を前面に葺き下ろす。拝殿は、桁行6間、梁間4間、入母屋造平入で正面は吹放ちとなっている【2-5-8】。



2-5-5 神帰り杉



2-5-7 明建神社 本殿



2-5-6 桜並木 馬場

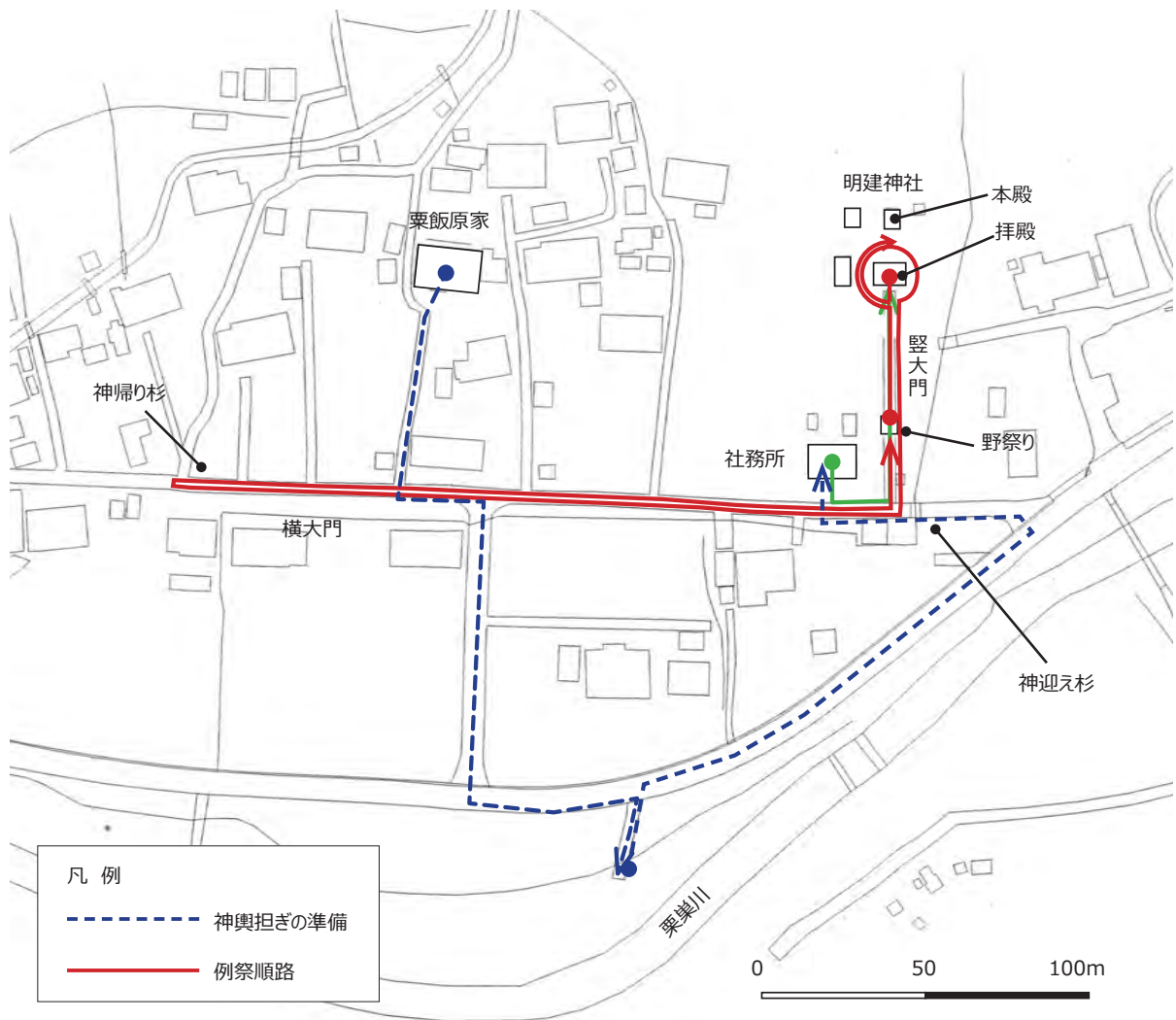
明建神社では、七日祭（県無形民俗文化財）という、旧暦の7月7日（現在の8月7日）に行われる例祭がある。記録では元禄6年（1693）「祭礼執行之儀式」の下書が最も古く、寛政6年（1794）～慶応2年（1866）の届出などでも確認できる。

明建神社の宮司を中心とした19家の宮座と呼ばれる集落・氏子による世襲的な祭祀組織の者と氏子の牧地区が行う。但し、神輿を担ぐ4名は牧地区より離れた落部地区在住の氏子が奉仕することとなっている。現在の神輿は、「万留帳」によると安政3年（1856）再造である。

七日祭は、その準備から始まり、8月1日には宮座の構成員が、供物のどぶろくの醸造を行う。5日午前中に、氏子全員で、境内の清掃、横大門の下草刈り、幟立など、ミヤクサウチ（宮草打ち）を行う。5日午後には社務所に集まり、祭具の破損部修繕や、御幣など、ヤワイを行う。5日夜には粳米を練って作った団子を笹の葉5枚でくるみ、藁で結び、鍋で煮る、笹巻造りを行う。笹巻は元禄の「差上状」に



2-5-8 明建神社 拝殿



2-5-9 配置と順路

もある伝統的な供物である。また、役者や氏子総代は1日から当日まで水垢離をとり、精進料理を主とし、酒色を断つ。神輿舁き（神前の舞の役）の代表は正月7日に神社に詣でる。

祭事次第は以下の通りである。7日午前には落部から神輿舁きの4人が御神酒を持参し、栗巣川で水垢離をとると、社務所で衣装に着替えて待機する。牧地区の役者も自宅で沐浴後、社務所に集合し、衣装に着替えて待機する【2-5-9】。

7日午後、一行は社務所を出て、竪大門を進み、手水で浄めて拝殿に向かう。神座に向かって左側に献幣使、来賓、氏子総代、右側に宮司（禰宜）、小禰宜、祝、餅つき等、中央手前に神輿舁き、鼻高、笛吹等が着座する。神前の儀、修祓、宮司一拝、役者による献饌（奏楽 妙見囃子という）、宮司祝詞奏上、玉串奉奠、役者による撤饌（奏楽）、神前直会、遷霊（奏楽）で本殿前で神遷しの祝詞を奏上し、御神体（御幣）を拝殿中央に移された神輿に奉遷する。続いて、神輿渡御では、神輿舁き4人が神輿を肩にすると拍子音頭取りが音頭を発すると笛と太鼓が道行の囃子を奏し、外で待機していた篠葉踊り子（8人）が応じる。拝殿を降りた一行は、露払いを先導にして拝殿を右回りに3回巡る【2-5-10】。行列は、露払い、幣持ち、献幣使、氏子総代、弓持ち、神輿舁き、拍子音頭取り、杵振り、笛吹き、太鼓打ち、太鼓担い、鼻高、獅子、篠葉踊り子、給仕となる【2-5-11】。

竪大門から横大門の道行となり、神輿は車に乗せられる【2-5-12】。神輿が「神帰り杉」【2-5-5】から還御に移ると篠葉踊り子が篠竹で獅子を打ち、獅子は勢いよくその篠葉を噛もうとして激しく舞う【2-5-13】。平静になった獅子は横大門を戻る。



2-5-10 拝殿を降りた神輿



2-5-11 竪大門 渡御



2-5-12 横大門を進む



2-5-13 還御での獅子と篠葉踊り子

神輿は横大門を戻り、神迎え杉の手前で左に折れ、鳥居をくぐる。神輿は鳥居の先に設けた野祭の祭場上座に安置され【2-5-14】、一行が祭場に着座すると給仕はどぶろくを注ぐ。

野祭の芸能は、神輿舁きによる神前の舞(神踊り)、杵振りの舞【2-5-15】、獅子起こしの舞【2-5-16】が奉納される。野祭りが終わると、一行は列を組んで帰社し、御神体を本殿に奉還して神事を閉じ、集会所で直会が行われる。

中世に郡上を治めた東氏によってこの地に移された明建神社は、周囲の東氏ゆかりの篠脇山城跡や東氏館跡庭園などとともに、中世の郡上の中心的地であった。近世以降は、郡上藩の城下町は八幡町へ移ったが、その後も、明建神社の祭礼は、大和町牧及び落部の人々によって受け継がれてきた。

牧地区の集落に流れる水路に沿った横大門は、神帰り杉から始まり、桜並木の外側には山林を背景とした集落景観が広がる。横大門を進み、神迎え杉が見えてくると、鳥居が左手に現れ、竪大門へ折れ曲がると明建神社の社叢に囲まれた中に、野祭りの会場となる参道の階段とその奥に拝殿が見えてくる。

夏の盛りに、深い緑に囲まれ、要所にいわれのある杉木立を配した明建神社で行われる七日祭は、中世に郡上を支配し、古今伝授という和歌の文化に明るい東氏が居館を築いた地で受け継がれている。この明建神社周辺に集積した東氏関連の史跡等とともに、東氏の歴史や文化とともに郡上の中世を伝える歴史的風致を醸し出している。



2-5-14 獅子の寝床岩に獅子頭を安置する



2-5-15 杵振りの舞



2-5-16 獅子起こしの舞

コラム 薪能くるす桜の上演

現在では、8月7日の夜に、拝殿で東氏ゆかりの演目である、薪能「くるす桜」が上演されている。「くるす桜」は「栗巢にある桜」という意味で、明建神社の桜並木のことだといわれている。この桜に誘われて、東常縁の霊が現れ、和歌の心を伝えるというあらすじである。

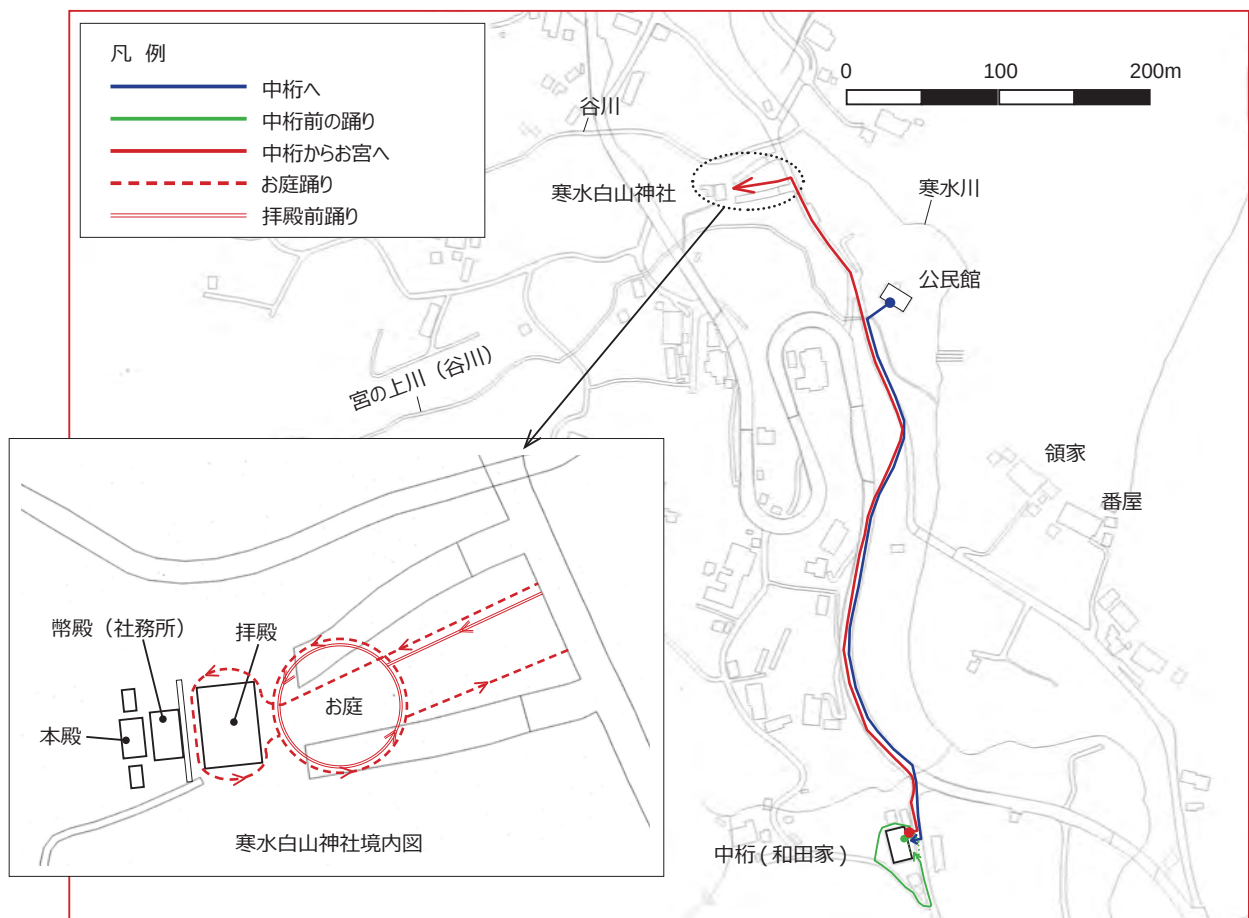


6. 白山神社と寒水の掛踊にみる歴史的風致

明宝の白山神社は、郡上市明宝の西部にある寒水に位置する。八幡町から国道472号線（せせらぎ街道）を12kmほど北上し、県道82号線を西に進むと明宝寒水である。南北6kmの帯状の山村集落である【2-6-1】。

白山神社は、明治26年（1893）以降の増田家の記録とされる『家頭記寺組』によると、「文正元年八月建立、惣氏子中」とあることから、文正元年（1466）創立とされている。また、神社南方に位置する浄土真宗金龍山本光寺が白山天台宗道場修善坊という、当社の別当寺だった。祭神は、菊理媛神、伊弉諾神、伊弉冉神で、白山大権現として木造聖観音座像を祀ってきた。寛文13年（1673）に当社に、天神社、宮ヶ洞社、若宮社、西の洞口社、村上社、馬塞谷社の村内の六社が合祀された。

白山神社境内は、杉木立の中、石造の鳥居をくぐると参道が続く。一対の石灯籠（昭和13年）の先には、拝殿の前庭があり、お庭という。庭は、掛踊の奉納場所である。参道の両側は、休みどこという役者の休憩場所である。拝殿の奥、石積み上部に幣殿（社務所）と本殿が石造の瑞垣に囲まれて建つ。



2-6-1 寒水白山神社 位置図

拝殿は、桁行5間梁間3間で、入母屋造平入り金属板葺で、天保13年（1842）の再建である【2-6-2】。本殿は、1間社流造、切妻平入、金属板葺、向拝がついており、安永9年（1780）に再建された【2-6-3】。本殿と拝殿の間にある幣殿は、桁行3間梁間2間、入母屋造平入り金属板葺である【2-6-4】。

神楽を打ち出す中^{なかげた}桁（和田家）は、吉田川の支流寒水川右岸にある【2-6-5】。伝承によると掛踊が伝えられた当初は田代（島崎家）という旧家から打ち出していたが、田代が退出したため、永く庄屋をつとめた尾会津（和田家）に一時移り、いつのころから中桁にかわったという。寒水川にかかる高橋から北上する旧道が「神様道」と称される巡行路となっている。

掛踊は、9月第二土日に試楽と本楽が行われ、両日とも中桁の庭から打ち出し、白山神社に奉納されるが、明治末期までは、神社から北北西およそ4kmの大洞峠に位置する奥の宮観音堂にも奉納された。市内にはほかにも掛踊は見られるが、その多くが不定期に奉納される中で、寒水の場合は定期的に継続して行われている。明宝寒水の白山神社の例祭は、昭和37年に「寒水の掛踊」で県無形民俗文化財に指定され、同49年には国の記録作成等の措置を講ずべき無形の民俗文化財となっている。

掛踊の起源は、宝永6年（1709）大和の母袋村から移譲されたという伝承がある。近世史料には、天明元年（1781）「当村白山大権現祭礼之覚」ほか、文政初頭のものとされる役者名簿の「寒水村踊行烈役者」がある。本楽は、寛政7年（1795）の「祭礼之覚」では八月朔日とあり、明治初期までは旧暦八朔であった。明治末期には9月8日、9日に変更し、現在では9月第二土日に行われる。

試楽と本楽は、昭和30年代からは同じ衣装で行



2-6-2 拝殿



2-6-3 本殿



2-6-4 石積と幣殿（社務所）



2-6-5 中桁

われている。公民館で準備が行われ、中桁で修祓と打出しから、「中桁前の踊り」に入り、旧道を巡行後、白山神社前で「お庭踊り」と「拝殿前踊り」を行う。

打出しの拍子打ちは、紙製蝶冠をかぶり、白帯で背中にシナイを、腹に太鼓をつける。一行は総勢130人ほどの構成となる【2-6-6】。背に負うシナイは、樽型の桶に長さ3.6mの竹8本に造花を飾り、上幅55cm、下幅25cmとなるように仕組む。

中桁前の踊りでは、居間で拍子を揃え、台所から出て、裏を廻って上手から庭へ入る。道行曲の「しゃげり」「妙見拍子」「おかざき」「こしずめ」と曲目を変えながら畑中を進み、ヒノリバに入る。十六拍子、七つ拍子、三つ拍子と続き、歌頭がすってんでんしこを打つ。中桁前の踊りは歌を伴う。拍子打ちが打ち上げ拍子を2回繰り返して中桁前の踊りは終わる【2-6-7】。

中桁からおよそ800m先の白山神社に向けて、神社までの巡行では、道行曲の「しゃげり」で出立する。行列は、7種の笛と拍子を、警固の合図で次々とかえて進んでいく【2-6-8】。

巡行は、寒水川に沿って南北に長い山間の集落の中で行われ、寒水川の支流の谷川や、田畑の間に家屋が点在する中を進んでいく。中桁より白山神社までは登りとなっており、現在の道路より低い位置にある旧道の「神様道」へ一端降りて、130人ほどの一行は一列で北進する。寒水川に流れ込む2本の谷川に挟まれた位置に建つ白山神社に向かっていく。

神社の鳥居をくぐり、参道を進むと【2-6-9】、「こしずめ」で庭の右側を通り、拝殿の背後、社務所との間を通過し、本殿を拝しながら左側から庭に出て、「七つ拍子」「三つ拍子」で輪を作っていく、「十六拍子」と続き、拍子打ちが休止する。

拍子打ちの世話役が、長さ3.6m、先が三又の竹

2-6-6 掛踊 役内訳

悪魔払い 1	長刀振り 1	地歌頭 2
露払い 2	折太鼓打ち 3	踊り子 16
禰宜 1	鉦引き 1	花笠 12
鍵取り 1	笛吹き 14	おかめの舞 2
御供 1	鯨折り 8	大傘持ち 1
音頭取り 2	田打ち 15	踊り幟持ち 4
出花持ち 2	大黒舞 2	吹流し持ち 1
神幟持ち 1	大奴 7	



2-6-7 中桁前の踊（昭和40年頃）



2-6-8 巡行の様子（昭和40年頃）



2-6-9 参道

を用いてシナイの先端を井桁に組む。拍子頭の合図とともに「てんつくて」を打出し、お庭踊りに入る。拍子打ちの振りは大きくなり、中心に向かってシナイを左右に振り、腰をかがめて地面につくほどしなわせる【2-6-10、11】。「しゃげり」の拍子で行列を整え、「妙見拍子」「おかざき」の道行曲で鳥居の外まで下がり、休憩する。「こしずめ」が演奏されると道行曲で参道から入り、庭に進んで輪を作り、「拝殿前踊り」に入る。先と同様の踊りの後、打ち上げの拍子を持って掛踊が終わる。

掛踊の勤仕者は、古くは若者組を継承した青年団であったが、昭和35年に全氏子による「掛踊り保存会」が設立し、寒水地区7組全戸から1名以上が奉仕することとなった。祭り宿（打出し宿）は中桁（和田家）が世襲で勤めている。

様々な役どころで構成され、130人ほどで行われる掛踊の一行は壮観である。

準備場所である公民館から旧道をくだり、様々な衣装や装飾を施された小道具に身につけた一行が、長い列をなして中桁に向かう。

中桁の庭先で行う「中桁前の踊り」では、多くの役どころが集約し、祭礼の中心が集落の中の1点に集中する。その後、旧道へ出て、再び長い列をなして、800m先の白山神社へ向かう様子は、ぐると山で囲まれたのどかな山村集落の中に、彩色豊かで、子どもから大人までが様々な役に扮し、笛の音とともに進んでいく。寒水白山神社の鳥居を入り、階段を上がると拝殿前の広場で一行は輪を作り、拝殿前の「お庭踊り」や「拝殿前踊り」となる。掛踊で印象的な3.6mのシナイを背負った拍子打ちのほかに、さまざまな役が演じられている寒水の掛踊は、緑豊かな山と川に囲まれた田園風景の中に位置する白山神社とともに歴史的風致を醸し出している。



2-6-10 お庭踊り 拍子打ち



2-6-11 お庭踊り

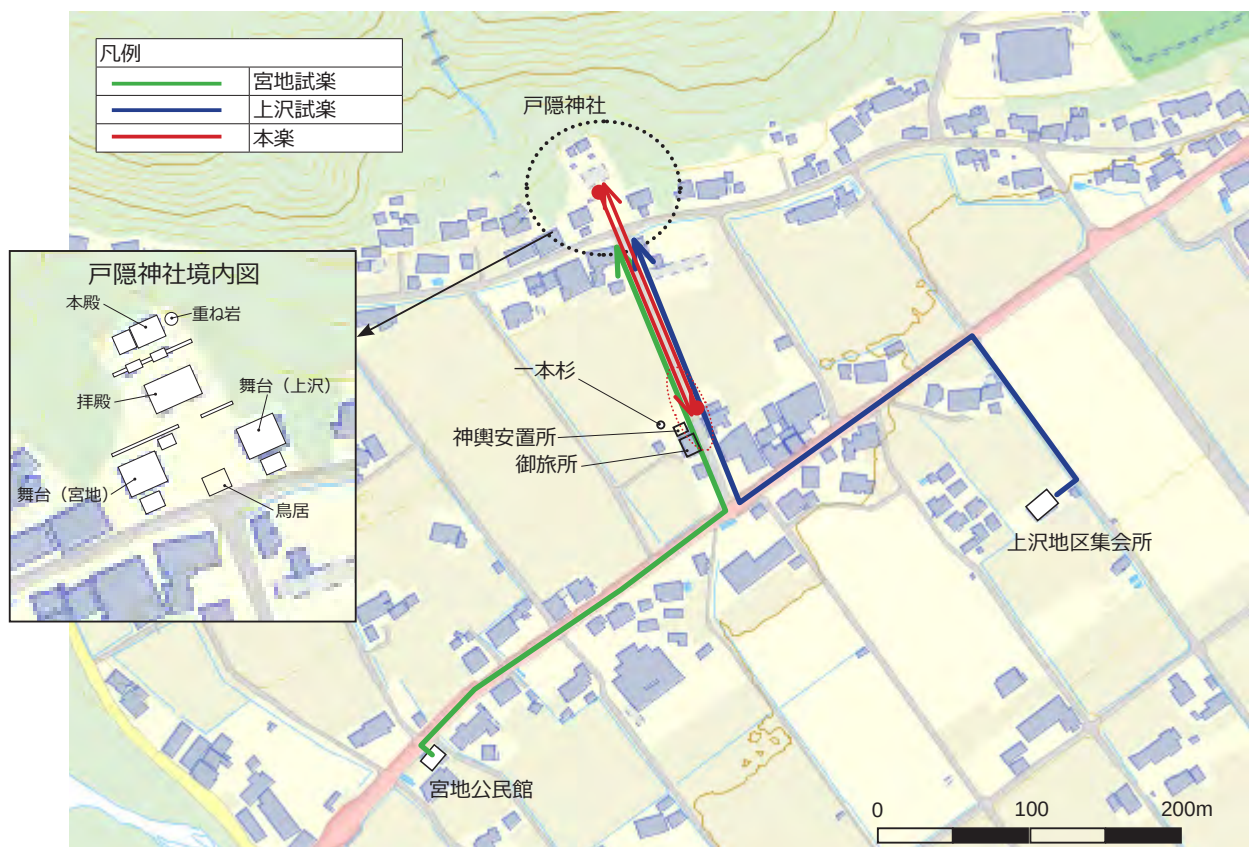
7. 九頭^{くず}の祭にみる歴史的風致

九頭の祭が行われる戸隠神社は、郡上市東部の和良町に位置し、八幡町からは堀越峠を越え、さらに国道265号線を進んだ和良町上野山の麓にある。和良町^{かみさわ}の上沢^{みやじ}と宮地との境が参道となっており、国道から北側の社叢へと伸びる【2-7-1】。

戸隠神社の主祭神は天手力男命であるが、古くから明治6年までは、九頭^{くず}大明神であった。九頭の宮とよばれ、「重ね岩」（市天然記念物）【2-7-2】が鎮座する古社である。「重ね岩」は『古事記』の天岩戸伝説の「手刀雄命」が投げた破片であるとの伝説がある。戸隠神社の由来は、慶応2年（1866）「九頭龍大明神由来書」によると、天正2年（1574）の頃旱魃にあい、雨乞いのために長野県戸隠山の地主神である九頭龍社の祭神「九頭龍大神」を勧進したと伝わる。社殿の創建は不詳だが、文禄3年（1594）落雷により焼失し、慶長12年（1607）藩主遠藤慶隆により再建された棟札が本殿に残る。近代に入り、明治7年（1874）に戸隠神社に改称した。



2-7-2 戸隠神社 重ね岩



2-7-1 戸隠神社 位置図と試楽順路

参道入口の西側には、戸隠神社の御神木である一本杉と社務所が位置し、参道の両側には用水が流れる【2-7-3】。大鳥居【2-7-4】をくぐると、西側に宮地、東側に上沢の神楽殿（舞台）が対面して建ち、本楽ではそれぞれの伊勢神楽が奉納される。舞台の前庭から階段を上がると瑞垣の内側に拝殿が配され、その奥にさらに石積み上の瑞垣の内側に本殿が配される。本殿の東側に重ね岩があり、そのほかにも通称男岩、女岩と呼ばれる大岩など計9個の岩が配置されている。

本殿は、桁行3間梁間2間、流造、向拝の手挟みに「昇り龍」、正面支輪に「波に水鳥」、長押上部に「獅子鼻」、臺股に「十二支」の彫刻が施されている。「十二支」には元文4年（1739）の寄進年が記されており、本殿は江戸中期の建築である【2-7-5】。

拝殿は、木造瓦葺、桁行6間梁間3間で、創建年代は未詳だが、宝永3年（1706）の棟札があり、昭和3年に現在地に移築した【2-7-6】。拝殿の奥の石垣の上に、本殿と末社があり、戸隠神社の本殿と舞台2棟は市重要文化財建造物となっている。

舞台は、ともに木造平屋建切妻造金属板瓦棒葺で妻側を舞台正面とし、回り舞台を備える。宮地の舞台は、桁行5間梁間6間で、明治23年に建てられた【2-7-7】。上沢の舞台は桁行3間梁間4間で、明治16年建築である【2-7-8】。

戸隠神社の例祭は旧暦8月15日に行われていたが、その後9月16日、昭和41年に9月15日とかわり、現在は10月の第二日曜日に本楽を行うこととしている。例祭は、九頭の祭として市無形民俗文化財となっており、和良町で最も大きな祭である。九頭の祭では、大神楽と伊勢神楽、からくりなどで構成され、宮地、上沢が各1組ずつ出す。

江戸時代では、宮地と上沢で諸役を担い、法師丸が神輿担ぎと神輿神楽の奉奏、下沢が上沢の曳山に奉仕し、4村で行われていた。中核の宮地は旗本領、



2-7-3 戸隠神社 大門と一本杉



2-7-4 戸隠神社 鳥居



2-7-5 戸隠神社 本殿



2-7-6 戸隠神社 拝殿

上沢は天領で、異なる領主の支配下であったため、別々に神楽を奉納していた。文化10年（1813）「九頭宮の祭り神楽行列之定書」によると、この年、両村は一つにまとまって奉納するよう話し合い、神楽の順序を決めたとある。これは現在も受け継がれており、法師丸と下沢は昭和3年まで奉仕していたが、現在は宮地と下沢で継承されている。

天保11年（1840）「郷中盛衰記」では、「九頭の祭り見物ニ行に黒もじの夏羽織着し行」といった祭り見物のことや、「・・・神楽下洞へ来れバ留置キ稽古致されしよし、喜八郎ハたいこ、縫右衛門ハ獅子、小善次ハ悪魔はらいなど是始りなり、外村々ハ宮地が元なり」と神楽を学ぶ村人の様子が書かれている。また、大神楽や伊勢神楽や芝居は祭礼の時に披露されたようである。弘化二年（1845）「九頭宮祭あやつり組連印書付之事」により、当時からからくりがあったことが分かる。

九頭の祭の特徴である奉納芸の役をみると、神楽総警護のもと、大神楽警護、馬乗り警護、伊勢神楽警護、操り警護、神輿警護が選ばれ、各係を総括、指導している。宮地、上沢は各々およそ50戸であり、各地区の役が100名ほどになるため、一人二役もある。【2-7-9】

祭礼の準備は、奉納芸の稽古、道具の修繕や製作など長期にわたるもののほか、試楽の前日に稽古の総仕上げ（仕組）、試楽日の午前中に神社の設え、参道の幟立てなどを行い、曳山を舞台から出し、参道に据える。午後に試楽を行い、翌日本楽を行い、本楽の翌日に後片付け（幟倒し）を行う。

試楽をみると、参道に安置した2地区の曳山から囃子が流れ、上沢は「ちゃんとこ」「那須与一」、宮地は「おかめ」「とんぼ返し」が演じられる。上沢の曳山は千鳥破風、宮地の曳山は唐破風である【2-7-10】。

次に、それぞれの集会所から、大神楽の巡行が始



2-7-7 戸隠神社 舞台（宮地）



2-7-8 戸隠神社 舞台（上沢）

2-7-9 宮地 奉納芸 役内訳

総警護	2
大神楽の部	53
大神楽警護1、舞子警護1、舞子指導3、舞子3、笛吹き5、笛吹き助4、鼓打ち5、鼓打ち助2、小太鼓打ち1、小太鼓打ち助1、大太鼓担い2、大出し持ち1、纏馬印持ち1、先箱持ち1、棒振り1、東西呼ばり1、小太鼓持ち1、獅子頭持ち1、大獅子回し12人、馬乗り6	
曳山の部	12
操り警護3、操り囃子方6、操り山こで3	
伊勢神楽の部	15
伊勢神楽警護2、悪魔払い1、獅子舞1、笛吹き4、小太鼓打ち2、おかめ1、神主1、出し持ち1、屋形担い2	
神輿の部	9
神輿警護2、神輿神楽5（笛2、鼓打ち2、小太鼓打ち1）、神輿担い2	
世話役	6



2-7-10 ヤマ（曳山）

まる【2-7-11】。西から宮地、東から上沢が大門に入ると縦二列に並び、総警護が打ち合わせ、神楽囃子を合奏する。先導、先箱持ち、纏馬印持ち、棒振り、馬乗り、大出し持ち、総警護、大太鼓、舞子、東西呼ばり、小太鼓、笛吹き、鼓打ち、大獅子で構成される。

社務所に隣接して神輿安置所が参道に面しており、御旅所となっている。上沢と宮地は1列になり、左回りで輪を作りながら「庭入り」を行い、大神楽の馬乗りが始まる。「直り駒」「引き返し駒」「休み駒」「進み駒」「駒違い」の演目続け、「庭引き」で一人ずつ去っていく。獅子が出てきて南面し、舞子や大太鼓と対面する。東西呼ばわりの神楽舞開始の口上後、笛と太鼓による「起こし笛」で始まり、獅子と舞子が舞い、「こすずみ」で大神楽が終わる。

曳山からくり人形の演技が始まり、上沢は「ちゃんどこ」「那須与一」、宮地は「おかめ」「とんぼ返し」である【2-7-12、13】。

本楽は、神事の神幸発興祭から始まる。社務所から氏子総代長、両地区長、神職、氏子総代、神輿担ぎ、神楽員、供奉者などで列をなし、参道を北へ進み、拝殿に入る。神事が進む中、神輿神楽員は「こすずみ」を演奏する。一方で、両地区の集会所から試楽と同様の神楽員に加え、伊勢神楽員、伊勢神楽屋形などの奉納芸の役が出立する。

神事が終わると、一行は御旅所へ向かい、参道を南へ進む神幸（神輿渡御）となる。大神楽の曲を演奏しながら進み、鳥居を出ると神輿を彩色を施した二輪車に乗せ、曲は「さがりは」となる。巡行してきた奉納芸の一行が御旅所南の参道に集結すると曳山は「ちゃんどこ」「おかめ」を始める。神幸の列が曳山の前でとまり、南の参道では、馬乗り役が整列する。

神輿が御旅所に安置されると御旅所祭となり、大神楽が奉納される【2-7-14】。続いて、曳山のからくりが演じられ、曳山に続き、先箱、馬乗り、大神



2-7-11 試楽巡行の様子



2-7-12 宮地のからくり とんぼ返し



2-7-13 上沢のからくり 那須与一



2-7-14 本楽 御旅所

楽員、伊勢神楽員、神輿、神輿神楽員、が長い列をなして還幸（神輿還御）となる【2-7-15、16】。

曳山が境内に入り、各舞台前の北側に置かれ、本殿祭では、神事や諸芸能が奉納される。馬乗りの演技【2-7-17】が終わると、中央を神輿が進み、拝殿背面に置かれ、伊勢神楽屋形は舞台に据え置かれる。神事が行われ、大神楽が奉納されると【2-7-18、19】、舞台上伊勢神楽が始まる。伊勢神楽は、「悪魔祓い」に始まり、「上使弁慶の舞」「カヤの舞」「鈴の舞」「幣の舞」「祭文」「おかめの舞」【2-7-20、21】が演じられる。伊勢神楽が終わると曳山からくりでは、宮地は「とんぼ返し」、上沢は「那須与一」が演じられ、曳山からくりの両端に飾られていた造花と筒を投げられる「花投げ」で終わる【2-7-22】。花はかつては養蚕の呪符であったが、現在では家内安全、交通安全のお守りとなっている。参詣人が帰る頃、余興の準備や宴会が始まる。



2-7-15 本楽巡行の様子



2-7-16 本楽 神輿（還御）



2-7-17 本楽 馬乗り



2-7-18 本楽 大神楽



2-7-19 本楽 大神楽



2-7-20 本楽 上沢 伊勢神楽



2-7-21 本楽 宮地の伊勢神楽



2-7-22 花投げ

九頭の祭は、近世において天領、旗本領であった頃からの社会的要因も受け入れながら、継承してきた。その結果、上沢・宮地の2地区同時奉納といった、市内では非常に特徴的な祭礼となっている。さらに、奉納芸能が、大神楽、伊勢神楽、市内でも希少なヤマ（山車）といった多岐にわたるのも、大きな特徴である。

宮地公民館、上沢集会所からの巡行は、和良の開けた田園風景の中を、それぞれ100名ほどの役柄やヤマ（曳山）が進んでいくにぎやかな一行となって現れる。そして、参道の少し前で2地区が調子を合わせ、競い合い、また同調させて参道を進んでいくと、戸隠神社境内では、二つの舞台が相対し、ここでもそれぞれの伊勢神楽が奉納される。

和良の山とみどりに囲まれた開けた平地を巡行しながら、山際の戸隠神社社叢へ集約し、磐座と社叢の中にたたずむ戸隠神社で行われる九頭の祭は、2地区の住民たちそれぞれが演じる多岐にわたる芸能と周辺の開けた田園風景が歴史的風致を醸し出している。